キッチン・ゴッズ・ワイフ

The Kitchen God's Wife

エイミ・タン

小沢瑞穂訳

上

エイミ・タンの第2作！

ジョイ・ラック・クラブ
前作を凌ぐ感動！
と全米でベストセラー

家族の絆を知恵の宝石（パール）でつないだ女たちの、喜びと哀しみの物語。

角川書店

キッチン・ゴッズ・ワイフ 上

エイミ・タン

小沢瑞穂訳

角川書店

キッチン・ゴッズ・ワイフ 上巻　エィミ・タン

発行日———平成 4 年 6 月 30 日　初版発行

訳者————小沢瑞穂
発行者———角川春樹
発行所———株式会社角川書店 〒 102
東京都千代田区富士見 2-13-3
電話————営業　03-3817-8521
編集　03-3817-8451
振替————東京 3-195208
印刷————図書印刷株式会社
製本————鈴木製本株式会社
ISBN4-04-791201-8 C0397

定価はカバーに明記してあります。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Printed in Japan

キッチン・ゴッズ・ワイフ 上巻

THE KITCHEN GOD'S WIFE

by

AMY TAN

Copyright © 1991 by AMY TAN

ALL Rights Reserved

Japanese translation rights arranged with

Sandra Dijkstra Literary Agency

through The English Agency (Japan) Ltd., Tokyo

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

献辞

私の母デイジー・タンと
母の幸せな記憶に今も生きている
私の父ジョン（一九一四――一九六八）と
兄のピーター（一九五〇――一九六七）に
愛と尊敬をこめて。

謝辞

この本の産みの母達、サンドラ・ダイクストラ、
モリー・ジャイルズ、フェイス・セールに感謝する。
作家としてこの三人の智恵と助言に助けられ、
友人として大いに励まされた。ロバート・フーソラップ、
グレッチェン・シールズ、ルー・デマッティにも感謝する。
この本を書くのに欠かせなかった暖かさとユーモアと
テイクアウトの中華料理を運んでくれたことに。

キッチン・ゴッズ・ワイフ上巻／目次

一章　神様の店　9
二章　トゥー大おばさんの葬式　49
三章　三日たった魚　79
四章　とてつもなく長い距離　97
五章　一万ものこと　117
六章　ピーナツの運命　149

七章　持参金の勘定　179
八章　ありあまる陰　209
九章　最高の日々　227
十章　洛陽の幸運　245
十一章　四つの亀裂、五つのひび　265

装丁／司　修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一章　神様の店

母が私に話すときは、いつも喧嘩でもしているような口調で話をはじめる。

「パール、どうしても行かなくちゃだめよ」先週の電話で母は言った。数分たってから母が電話してきた理由がわかった。ヘレンおばさんが私の従兄弟のバオバオの婚約パーティに家族一同を招待しているのだ。

〝家族一同〟とはクォン一家とローイー一家のこと。クォン家にはヘレンおばさんとヘンリーおじさん、メアリー、フランクとバオバオがいる。最近〝ローイー家〟といえば母と私だけになってしまった。父は亡くなったし、弟のサミュエルはニュージャージーにいる。クォン家は血縁ではなく姻戚でしかないのに、記憶にあるかぎり私達は〝家族一同〟でとおってきた。ヘレンおばさんの最初の夫は私の母の兄で、彼は私が生まれるずっと前に亡くなった。

私の従兄弟のバオバオの本名はロジャー。みんな赤ん坊のころから彼をバオバオと呼んできた。〝大切な赤ん坊〟という意味だ。大きくなってもそう呼ぶのは、私のおじさんかおばさんが部屋に

入ったとたん私達にからかわれたと泣き声で訴える赤ん坊だったからだ。もう三十一になっているのに、私達はまだ彼のことをバオバオと呼んでいる――そして、からかっている。

「バオバオが？　どうして婚約パーティなんかできるの？」私は言った。「結婚するのは今度で三度めじゃないの」

「四回めの婚約よ！」母は言った。「この前なんか、うちがプレゼントを贈ったあとで婚約破棄するんだから。もちろんヘレンは婚約パーティなんて言ってないわ。ただメアリーのために一同で集まりましょうって」

「メアリーが来るの？」私はきいた。メアリーと私のあいだには従姉妹を超えた歴史があった。彼女はダグ・チューと結婚し、その学生仲間に私の夫のフィル・ブラントがいた。事実、十六年前に彼女の紹介で私達は結ばれたのだ。

「メアリーが来るのよ、旦那さんや子供達と一緒にね」母が言った。「来週ロサンジェルスから飛行機で。格安チケットが手に入らなくて正規のチケットで。信じられる？」

「来週？」私は口実を探しながら言った。「急な話だからこっちの計画を変えるのはむずかしいわ。うちは来週ちょっと……」

「ヘレンおばさんはあなたがたも勘定に入れてるわ。ウォータードラゴン・レストランで盛大な夕食会ですって――テーブル五つのね。あなたがたが来なければテーブル一つ半が空いてしまう」

私はヘレンおばさんを頭に浮かべた。もうテーブルの脚の長さに背が縮んで丸くなっている。

「ほかにだれが来るの？」

「大切な人ばかり、おおぜい」母は〝大切な人〟とは嫌いな人とでも言いたげな口調で答えた。
「もちろん彼女はバオバオが新しい婚約者を連れてくるとみんなに言ってるわ。みんな〝婚約者？バオバオに新しい婚約者だって？〟ときくのよ。ヘレンったら〝ああ忘れてたわ。そこで発表してみんなをびっくりさせることになってたのに。だれにも言わないでね〟だって」
母は鼻を鳴らした。「彼女はそうやってみんなに触れ回るんだから。だから今度はあなたもこっそりプレゼントを持ってくることね。こないだは何を贈ったの？」
「バオバオとあの女子大生に？　覚えてないけど、たぶんキャンディ入れよ」
「婚約を解消したあとで彼はそれを送り返してきた？」
「それはないと思うけど。覚えてないわ」
「ほらね！　クォン家はいつもそうなのよ。今度はあまりお金をかけなさんな」
その夕食会の二日前、また母から電話があった。
「もう何をやっても手遅れだけど」母は、何もかも私のせいだといわんばかりに言った。それから私の大叔母にあたるトゥー大おばさんが九十七歳で亡くなったと告げた。それを聞いても私は驚かなかった。もうとっくに死んだと思っていたからだ。
「あなたに素敵なものを遺してくださったの」母は言った。「この週末に取りにくるといいわ」
トゥー大おばさんはヘレンおばさんの親戚で、彼女の父親の腹違いの妹とかいう話だ。でも大おばさんの世話をしていたのはいつも私の母だったと記憶している。母は毎週のように大おばさんのごみを運び出していた。〝賞金額百万ドル〟の一語の横に彼女の名前が印刷された通知が来るたび

に、その雑誌を定規購読しないよう説得しつづけた。彼女の漢方薬のために何度も医療扶助を申請した。

何年も母はそうした世話をするのがヘレンではなく自分だと私に愚痴をこぼしてきた。

「ヘレンときたら、そのそぶりさえみせないんだから」と母はよく言ったものだ。そんなある日――たぶん十年ぐらい前――私は母にたてついた。「ヘレンおばさんにそのことを話して愚痴を言うのをやめたらどうなの？」そう言ったらどうかとフィルが提案したもので、母に不満の原因を突きとめさせて解決策をとらせるには最善の方法だった。

だが、私がそう言ったとき、母はあっけにとられた表情で私を見つめて押し黙った。それからは私に愚痴を言わなくなった。実際、二か月も私に口をきかなかった。また話すようになってもトゥー大おばさんのことは二度と話題にしなかった。彼女がとっくに死んだと私が思っていたのはそのせいかもしれない。

「死因はなんなの？」その知らせを聞いてショックを受けたと感じさせるよう、静かな声で私は言った。「心臓発作？」

「バスよ」母は言った。

明らかにトゥー大おばさんは最期までぴんぴんしていたらしい。彼女が乗っていたカリフォルニア・ワンのバスが、母が言うところの〝悪ガキどもの改造車〟が信号を無視して突っ込んできたのを避けようとして片側に寄った。はずみで大おばさんは前に投げ出されて転倒。もちろん母は直ちに病院に駆けつけた。よくある打ち身や擦り傷のほかはとりたてて異常はない、と医者は言った。

だがトゥー大おばさんは、自分が気づいているものを医者が発見するまで待っていられないと言った。そして、母に遺言を書き取らせた。三十年たった古いソファや黒白テレビを誰に遺すか、といったようなことを。その夜遅く彼女は原因不明の発作で死んだ。ヘレンは翌日お見舞いに来るはずだったが間に合わなかった。

「バオバオ・ロジャーは賠償金を請求するべきだって言ったのよ、百万ドルも」母は報告した。「想像できる？　なんていう考え方なんだろう。トゥー大おばさんが死んだとわかったとき涙も流さず、死人からお金を引き出そうとするなんて！　ふん！　彼女が電気スタンド二つを彼に遺したこと教える必要はないわよねえ？　言うのを忘れたことにしようかしら」

母は一息ついた。「ほんとにいい人だったわ。もう花輪を十四も受けてるのよ」それから母は小声で言った。「もちろん、うちはみんなに二十パーセント値引きしてるけどね」

母とヘレンおばさんは、共同でチャイナタウンのロス・アレーにあるディンホー・フラワーショップを経営している。その話がまとまったのは二十五年前、私の父が死んでヘレンおばさんが仕事をくびになったときだ。そのフラワーショップは、不幸に取って代わる夢になったのだと私は思う。

母はファースト・チャイニーズ・バプテスト教会からの寄付金を元手にした。父はそこの副牧師だった。ヘレンおばさんは別のフラワーショップで働いて貯めたお金をまわした。彼女はそこで商売のこつを身につけたのだ。彼女がくびになったのもそこだった。理由は「正直すぎたため」だとヘレンおばさんは私達に打ち明けた。母は、ヘレンおばさんが客に無駄遣いさせまいとして一番安い花束を勧めたからだとみていた。

「中国人と結婚したのを後悔するときがあるよ」私達がサンフランシスコに行かなければならないとわかったときフィルが言った。私達の家があるサンノゼから往復百マイルの旅で、もっと悪いことに週末のフットボール試合の混雑と重なっていた。結婚してからの十五年で彼は私の母を大好きになってはいたが、それでも母の要求に腹をたてることもあった。それに、妻の実家の親戚と過ごす週末は、病院勤めの休暇としては好もしい過ごし方ではなかった。

「どうしても行かなくちゃならないのか？」彼は、ぼんやりと言った。彼はラップトップ・コンピュータに入れたばかりの新しいソフト・プログラムに熱中していた。彼はキーを押し、画面をのぞき込んで「やったぞ！」と叫んで手を叩いた。フィルは四十三で、しなやかな白髪に落ち着きと威厳を感じる人がほとんどだ。でも、その瞬間の彼は、おもちゃの戦艦で遊ぶ少年のように夢中になっていた。

私も新聞の求人欄をじっと読むふりをした。三か月前に私は地元の学区を受け持つ言語矯正士の職についていた。基本的にはその仕事に満足していたが、もっといいチャンスを逃したのではないかとひそかに悩んでいた。その思いを私に吹き込んだのは母だった。ほかの二人の候補者をおさえて私が選ばれたと告げた直後に母は言った。「二人？　たった二人しかその仕事に応募しなかったというの？」

フィルが何か言いたそうにコンピュータから顔をあげた。彼が何を考えているのか私は知っていた。二人が〝健康問題〟と呼んでいる私の多発性硬化症のことだ。まだ衰弱するまでにはなっていないが、そのせいで疲れやすくなっていた。「ストレスだらけの週末になるだろうな」彼は言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com